

少かに經典を誦し、飲食を貪嗜し、其の身を長養す。○袈裟を服すと雖も猶獵師の細めに視て徐に行
くが如く、猫の鼠を伺うが如し。常に是の言を唱えん、我羅漢を得たりと。○外には賢善を現し、内に
は貪嫉を懷かん。瘧法を受けたる婆羅門等の如し。実には沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛に
して正法を誹謗せん」等云云。妙樂云、「第三最も甚だし。後後の者転た識り難きを以ての故に」等云云。
東春云、「第三に或有阿練若より下の三偈は即ち是れ出家の処に一切の悪人を撰す」等云云。東春に
「即是出家処、撰一切悪人」等者、当世日本国には何処ぞや。叡山か園城か東寺か南都か、建仁寺か
寿福寺か建長寺か。よくくたづぬべし。延曆寺の出家の頭に甲冑をよろうをさすべきか。園城寺の五
分法身の膚に鎧杖を帯せるか。彼等は經文に「納衣在空閑」と指にわにず。「為世所恭敬、如大通羅漢」
と人をもはず。又「転難識故」というべしや。華洛には聖一等、鎌倉には良觀等ににたり。人をあだむ
ことなかれ。眼あらば經文に我身をあわせよ。

止觀第一云、「止觀の明静なる前代未だ聞かず」等云云。弘一云、「漢の明帝夜夢みしより陳朝に泊ぶ
まで○予め禪門に廁りて衣鉢伝授する者」等云云。補注云、「衣鉢伝授とは達磨を指す」等云云。止
五云、「又一種の禪人、乃至、盲跛の師徒、二俱に墮落す」等云云。止七云、「九の意、世間の文字の
法師と共ならず。亦事相の禪師と共ならず。一種の禪師は唯觀心の一意のみ有り。或は浅く或は偽る。
余の九は全く無し。此れ虚言に非ず。後賢眼有らん者は、当に証知すべきなり」。弘七云、「文字の法
師とは、内に觀解無くして唯法相を構う。事相の禪師とは、境智を閑わず鼻膈に心を止む。乃至、根本